小說『ジュンの順應』

注意

- ■ **成人對象** ― 二十歳以上の讀者を對象とします
- ■ **小說**（フィクション）― 實在の事柄とは關はりありません。又、描寫中の行爲を奬めるものではありません
- ■ **性描寫** ― 性行爲の詳細な描寫を含みます

作品情報

平成三十年九月一日　第一版發行

平成三十年十二月二十二日　第二版發行

最終更新　平成三十一年一月五日

著・發行者　絲

letter@sinumade.net

http://kimitin.sinumade.net/

附錄

『ジュンの順應』後書

http://kimitin.sinumade.net/2018/2-atogaki

『ジュンの順應』HTML版

http://kimitin.sinumade.net/2018/2

『ジュンの順應』テキスト版

http://kimitin.sinumade.net/2018/2-text

ジュンの順應

「あー、最惡、最惡、もう、ムカつく相手」
私は一昨日の相手の事を、掻い摘んで話した。
「だつたら切ればいいぢやないですか」
彼は私と似てゐる、解答（こたへ）がはつきりしてゐる事に對して、容赦が無い。
その部屋に二つある机の、狭い方で愚癡を零す。突つ伏したら行儀が惡いとピシャリと言はれ、二人分の茶が運ばれた。
もう一つの、彼の勉强机は、不揃ひのコピー用紙で埋まつてゐる。ベッドの周りには本が積まれ、脱ぎ散らかした上著が何著か、くたつとなつて端の方に掛つてゐた。彼の文面は整然としてゐるが、部屋は世の獨身男竝に、雜然としてゐた。
「掃除機、買つたの？」
「まだですよ」
そもそも掃除機を掛ける場所（スペース）が無いといふか……。
お茶を飲む横顔はまだ幼さが殘つてゐて、太い、黒縁の眼鏡が、私はあまり好きでなかつた。
多分、初戀――それが戀であればだが――人生で唯一の戀人だつた男に似てゐるからだ。何の因果か年齢（とし）も同じだつた、二十四歳。あの時は同い年で、でも今は四五歳も年上で、しかし自分がさういふ歳だといふ自覺も無い。相手が見た目の割に堅いからかもしれない。大學院生といふ話だつたが、大學に行つた事も無い私には、それがどういふ身分かといふのは全く分らなかつた。
ただ難しい――何某（なにがし）かを書いたり考へたりしてゐる、といふ事だけ。
「ジュンちやんも意外とケチだよね。安くなつた時にしか買はないつて、それ、いつまで經つても買へないパターンだよ」
私はそれで五年も電子レンジを買へてゐない男を知つてゐる。
「それが一番合理的なんです」
「それで五年も買へなかつたらさ、多分、それは要らないものなんだよ」
彼はジュンロと名乘つたが、實際に會ふ段になると、本名で呼ばれたがつた。私はジュンと呼んでゐたが、本名も〝ジュン〟がついてゐて、だからこのままでいいぢやない、と私は言つた。
一方で私には本名の開示を求めないどころか、半年經つた今でも、律儀にミルキーさん、と口走る事もあるくらゐだつた。
「今日は冷房、入れてるんだ」
「昨日より二度も高いですし、體溫の管理は、大切ですから」

その視線は、何となく、私の胸元にいつてゐる氣がする。彼が女體のどの部位が好きかなんて、聞いた事は無い。思へば、この男とはあまり浮れた話をしてゐない——できないといふか。
私と彼との關係は、性質としてはメル友に近く、通話よりも長文メッセージのやり取りが主體だつた。彼の本分がまづ、長文になつてしまふらしい。かといつて即時（リアルタイム）でそれをやるのはきついので、メールのやうに、少し間を置いて往復してゐた。私は文字での會話が煩はしくて通話をしてゐる口だが、彼の「話」は面白かつたし、私自身長文を書くのは——たまに書く分には——樂しいと感じるので、その思考の應酬に附合つてゐた。彼の內容としては日常諸々に對する考察・問題提起であり、そのへんの〝ブロガー〟が好んでするやうな題材、書き方をしてゐた。そこからいくと私の散文は奔放で、それこそ會話をするやうにぶちまけてゐるので脫線する事が多く、彼の整理された〝論文〟とは正反對をいく。それでも彼はその自由さを氣に入つてくれたやうで、もう半年もそんな、ぐだくだとした、謂はば思想觀念ぶつた愚癡大會が續いてゐる。
　彼が會はうと言出したのも「話し合」つてみたかつたからだ。眞面目くんなもんだから、私の快樂主義的な人間關係（つきあひ）など知れたら眉を顰（ひそ）めさうだ、と思つてゐたが、精神安定劑みたいなもの、ココアとかポテチとか、砂糖、その他抗鬱劑なんかと同じ、と言つたら、それですんなり納得した。納得した？　……許容した、といふ方がいいかもしれない、彼にとつては「理由」や「道理」、行動原理が大事なのだ。その上、自分の思想體系と合ふかどうかが——つまりは、普通の人が普通にやつてゐる、「判斷基準（いい人なのかどうか）」なのだけれど。
「おつぱい、好き？」
　さう言つて微笑（にやつ）いた、今日はちよつと屈（かが）めば谷間が見える、そんな服を著てゐた。
「別に、どこも好きぢやありません」
「ぢや、全部好きつて事なんだ」
「『好き』ぢやないつて」
　彼は私が誘つた時從順だつた、本當に「意外と」。いつも自分からは誘はないのだけれど、彼の性格からいつて、絕對誘つてはくれなささうだつたから。でも眞正面から言ふのは、やつぱり應へた、相手は年下だし。
　糞眞面目な彼が誘ひに應じる意義、そんなものは知らないけれど、同じでせう、性欲處理。

　順番こ（かはり）にシャワーに入り、私たちは、キスをした。
　なんて事のないキス、私はいつも眼を瞑つてゐて、たまに薄（うつす）らと開けると、彼はこちらを見てキスしてゐる。……ちよつとこはい。眼鏡の縁（フレーム）が顏に當る度、鬱陶しい、と思つてしまふ。
「セックスする時くらゐ、眼鏡外したら」
「僕の視力は〇・〇二なんです、間近でも顏が見えないんです」
「あたしのブサイクな顔なんて、見なくていいでしよ」

眼鏡に手をやると、手に手をやられ、私は仕方無く引つ込めた。このプラスチックの感觸が嫌ひ、硬くてつるつるして冷たくて……、思ひ出してしまふ。

彼は私の首筋に口附け、二人してベッドに倒れ込む。

〝どうして――〟。何だつけ、初めてした時、言はれた言葉。中々美味しい言葉だつたはずなのに、思ひ出せない。確か文面の事を高く買つておいて……、何だらう、豫想に反して私が馬鹿つぽかつたとか、そんな言葉だつた氣がする。それに對して私は言つたのだ、「だつて私は、馬鹿だから」。それだけは憶えてゐる。

彼は私の文面を思ひ浮べてゐたのだと思ふ、でも違ふの、これが私、今あなたが觸れてゐる私が、生身の私。

「……」

私はあまり聲が出る方ではない。演技もできない。だから率直に言葉で傳へようとするのだけれど、どこか官能に缺ける氣がする。氣持いいよ、もつとして、さう傳へたいだけなのに、何回セックスしてみても、これだけは上達しないでゐる。

叮嚀に女を扱ふのが彼の流儀らしいが、私が要望を出すと、二回目のセックスからはそのやうにした――しかしその從順さも一時だけで、彼は終りが近附くと私を無視する――それが私を〝幸せ〟に導く確實な方法、といふわけだ。押附けがましいにも程があるが、私ははつきりとその〝不滿〟を洩らした事は無かつた。

彼が押したり、私が引いたり、ぶつかつて、まるで餅搗きみたいな問答も、昂奮こそすれど、行著く先が決つてゐるなら冷えてゐる。餅は固まつてゐる。

「……」

彼が容態を問うた。

私はいいよ、と言つた。

「あなたは、どうなんです、……」

あなたの力量ぢや無理よ、お馬鹿さん。私は別に、どうでもいいから――

氣持よくなりたくて、切望して、漸くセックスしてるのに、それが實際に始まると、當の目的は失せてしまふ――私はセックスすら面倒臭がつてゐるのだ！　氣持よくなりたいくせに、人一倍性慾が強いくせに、男が好きなくせに、怠惰の方が勝つてゐて、くそ。慾求不滿が募る。でもそれが私の選擇し、受容れもする、私の性分。

「いいの……」

〝私も〟なんて、そんな嘘、とつても吐けない。下手なセックス已上に、嘘のセックスは最低だ。〝いいの〟つて言ふのも、曖昧だけど。

一通りが終つて、ベッドに横になり、彼も私の隣に横たはつた。
彼は腕枕をしたり、抱寄せたり、背中を撫でたり、なんて甘い事はしなかつた。意義が無ければしない、女には酷く刺さる態度を貫いた。不器用、いや、研がれ過ぎた刃物（ナイフ）。相手を刺殺（さしころ）すためだけのナイフ、性欲を吐いて捨てるためだけのセックス。私がしてゐるのもそんなセックス、でも、もつと、愛情つぽいものが欲しいぢやない。
「……」
「……え？」
やつつけないと、氣が濟まなかつた。

＊　＊　＊

「あんな事しないで下さいよ」
息が整ふと、彼は言つた。
「なにが？」
「加減してくれれば、ちやんとできたのに……」
「またしたかつたの？」
「あなたが氣持よくないぢやないですか」
ふゥ、と笑ふ。
「あたし、今のでも充分昂奮してるわよ。悶えてるあなた、かはいかつたし」
「それぢや僕にもあなたにも公平（フェア）ぢやない」
「ふん、フェアとかなんとか……さういふのは、もつと上手くなつてから言ひなさいよ」
ああ、言過ぎちやつたかな。怒られる前に、ベッドからすり抜ける。尤も、彼は暴力に頼つたり、怒號を飛ばしてくるタイプではなかつたが。——とはいへ、本氣で怒らせた事は無い。
「あなたが、協力的でないから」
「まあね、それは、認めるわよ。でもあたしはこれで満足してるし、あんただつて最後までしてるんだから、いいぢやない。上手くなりたいなら、もつと積極的な先生を見附けなさいよ」
私にはこれくらゐしか當て附けやうが無い。
「あー、おなかすいた」
「食事をするなら、シャワーに入つてからにしてください」
「言はれなくてもよ」

溫いシャワーをかぶりながら、やつぱりこの男とはぎくしやくしてゐる、と思つた。別に感情が無いわけぢやないのだ、變に一途といふか、〝目的〟に徹してゐる。でも時間を掛けて良くなつていくなんて、そんな事。根が惡い奴でないだけに。きつと理想を追求めてゐるだけなんだ、頭で理解して、でも體も感情も〝理解〟できないもので、だからこんがらがる。總てが理屈通りにはいかない。……何だか昔の私みたいだ。だから餘計むかつくのかもしれない。眞面目過ぎるんだよ、あんた。セックスくらゐ、もつとふざけなよ。あるいはふざけないのが、あんたのおふざけ。

浴室を出ると、机にはコンビニ辨當と、即席の味噌汁カップが二つあつた。

「なんだ、あんたあ、人にはシャワー入つてこいつて言つておいて、セックスした體でコンビニなんか行つてたの？」

「……」

「でもありがと、すぐ食べたかつたんだ、ありがとね」

氣遣はせてごめんね、と言ふと、いいえ、と短い返事。

「シャワー、浴びてきなよ。あたし待つてるから」

「いいですよ。先に食べててください」

……眼を瞑つて、彼が出てくるのを待つ。うつかりしてゐると、そのまま寢てしまひさうだ。ああ。もう一回ベッドで横になりたい。でもお腹も空いてるし、何か輕く口にできるものでもあればいいんだけど、勝手に冷藏庫を開けるわけにはいかない。後がうるささうで。代りに味噌汁のカップの封を切つて、いつでも入れられるやうにしておいた。辨當は、溫めておいた方がいいだらうか？　分らなかつたので、シャワーが止まると同時に、自分のだけ溫めておいた。彼が溫めると言つたら、こつちから出せば良い。

「先に食べてて良かつたのに」風呂から上がつてくると、彼は言つた。

「お辨當、あつためる？」

「いいです。それよりあなたは、服を著てください」

「……はいはい」

私がシャツとズボンを身に附けてゐる間に、彼は味噌汁を溶いた。別に下著だつていーぢやん？　改まる場面でもないくせに。

食卓は靜かだつた。味噌汁を吸ふ音、咀嚼する音、頭も疲れ切つてゐたから、特に話す事も無い。

お腹は何とか滿たされ、それから、それから……する事も無くなつた。ジュンと逢ふ時は、本當にセックスする時だけだ――どこかに行かうとか、あれしたい、これしたい、冗談めかした事一つも無かつた。かうしてみると、彼と私とはえらく希薄だと感じる。

その裏に積重ねた言葉があるとしても。觸合へる總てが眞實ではないにしても。寂しく、冷たい。
「あたし、歸るわ」
「さうですか」
雨がベランダを打つてゐた。燈が無いために部屋は暗く、青かつた。さうだ――燈の無いままで、飯を食つてゐたんだ。
私は押戻した椅子をもう一度引いて、坐り直した。
彼の睫毛が、私に瞬く。
「もう逢ふの、やめませうか」
「……え。
どうして、なんで、理由はなんです」
あつさり承諾すると思つてゐただけに、その樣子が意外といふか、嬉しいといふか――。
「見込みが無いから」
「なんの？　セックスの？」
「寧ろ、セックスしかないいんぢやない？」
「それは、あなたが――さつき言つてゐたぢやないですか、自分は今のままで滿足だつて、だのに、」
「んー、私のセックスつていふのは、體だけぢやなくて、やつぱり人同士の樂しさつていふか……あたしとあんたつて、會話繫がらないぢやない、正直」
「そんな事……」
勝つのはいつだつて口頭の言葉だ、分つてるでしよ、私たち、今會つてるの。口を使つて話してゐるの。
「やつてても樂しくない」
「……僕は」
「氣持いいのと、樂しいのつて違ふの、多分、あなたも分つてると思ふけど。虚しいでせう？いつも」
滿足感が無い、安心感が無い、目が覺めたら何しよう、つていふわくわくが、想像が無い、それでセックスなんて、できるか？　關係を、維持したいと思ふか？
「あたしは思はない、もう、續けたくない」
彼は默つてゐた、耳朶まで赤くなつてゐた、恥ぢてゐるのだらうか、辱めだと思つてゐるのだらうか？　分らない、どうでもいい、さつさとこの場を立去りたい。
「とにかく、あたしはあなたと逢はないよ」
床にぐづぐづになつてゐた上著を取る。「ぢや、今まで、ありがと、それは本當に、思つてる」

「待つてくださいよ！」

彼はまた珍しく――。思考の間に附込んだのは私だ、承知てゐる、でもさ、かうでもしないと、逃げられないよ。

「どうして――あなたつていつつもさうだ、一方的に、終らせて」

「うん？」

「僕が、がんばる……解決する、その努力も、改善も、何も聞かずに、去つていく！」

「あのねえ、ジュンくん、ここは學校でもないし、會社でもないのよ、一方が逢ひたくないつて言つたら、人間關係はそれで終り！　あんた、これ已上執著するなら、ストーカーよ」

「そんな勝手な！」

「勝手なのが人間關係よ。現にあなた、どうする？　あたしがこの場から去つて、あんたのID消して、これ已上あなたになにができる？　なにもできないでせう？」

「だから……、僕には提供できるつて」

「それ、附合つてるうちに示せないと、意味無いの」

「あなたが不平を洩らさなかつたから」

「ああ、でも、私は『解決』なんて望まなかつた、それすら望まなかつた、もう最初つから、手の込む『解決』とやらをするなら、あなたと訣れた方が徳だつて、ずつと思つてた。酷い？　ごめんね」

「酷い！　あなたは酷い！」

「ふ、ごめんね、ほんと、私つて酷い女だ」

「あなたはさうやつて氣取つて、人を傷附けて、自己像を満足させる」

「かもね、でも、同じくらゐ、私は人との關係に貪欲なの、求めてしまふものなのよ」

「ジュンくん」

私が兩の手で燃えるやうな頰を包込むと、彼は嚴つた、パシッと、音がする程鋭く、私の手首を摑んだ。赤い目には涙が浮んで、情慾が涌いたみたいだつた。今までで一番情熱的だつた。

「ゆるさない」

「ゆるさない？　だつたらどうする？　あなたはあたしと何がしたいの？」

彼は手首を摑んだまま私を押した、とびきりこはかつた――本當にバチンと、勢ひよく頰を張られさうで。私は恨みを買ふよりも、暴力を振るはれる事の方が、ずつとこはかつた。

「出て行つて、出て行つてください……！」

無理矢理押しやられ、足元がぐちやぐちやになつたまま、私は外に追はれた。ああ――その烈しさがこはくて、私は涙を一つ二つ零した。

これだから人の激情には耐へられない。應へる。……

＊　＊　＊

私つて惡い女かしら、なんて未だに考へてしまふ。うーん、惡い女だつた、惡い女だつた……だつて、合はなかつたんだもの。それつて、自然で合理的な選擇ぢやない？　これつぽつちも自分が惡いだなんて、思つてやしない。それどころか、清々してゐる。

あれ已來、ジュンからメッセージが來た事は無い。そりやさうだ、削除したんだから。あの日、――一昨日のさいてーな男と一緒に。同列だとは思はない。でも、二人して「合はなかつた」といふのは同じで、最早〝解決〟の見込みが無い事は、彼らにも私にも分つた事だらう――私はやると言つたらやる女だ！

「なにしてんの」

ぼーつと、スマホの畫面を見てゐたら、聲が掛つたので、私は畫面をロックして、椅子に抛（はふ）つた。「墓に葬つた男どもの事」

「こわ」

私が附合ふ男といふのは、つくづくどうしやうもなくて、でもとんでもなくかはいらしい部分があつて、たまらなかつた。だからついつい、手が出てしまふ。――だめだな、それ、典型的な浮氣人間（をとこ）の性根といふか、でも私には「浮氣」なんて無いし――いや浮ついた氣、氣の多い人間なのは確かなのだけれど、それが惡いとか惡癖だとかは思つてゐない、全然。今だつて、過去の戰利品を數へてゐた、たつたそれだけ、蔑（ないがし）ろにしてゐるつもりは無い、寧ろ、彼らを大切にしたいから訣れた、たつたそれだけ。ずつと續く關係なんて無いよ、變らない關係なんて無いよ、何もかも過去（すぎさ）つていくよ、あるのは今の娯樂（らく）と慾望（よく）だけ。

「ダルちやんも、すぐお墓に入れてあげる」

「んー、おれは鳥葬（てうさう）がいいな」

「そこはあたしに食べられたいつて、言つてよ」

「やだよきもちわるい」

「あたしはきもちわるくて、鳥さんにはいいんだね」

「いやなものは、いやだからね」

「……うん、道理（だうり）だ」

ぎゆ、つと、足元にもたれ掛つた、大きな大人（こども）を抱締める。

このこどうは、いまここにいきてゐるぞ。

それを今（これから）、とんかちか何かで叩いてぽんこつにしてしまふ、かはいい、三十二年生きてる男の子。

君といふかはいさに觸れられれば、今は、それで。

〈了〉